

「お、おはようございます……」

事務所の中に、小さな声が響く。

挨拶の主は、今日はオフであるはずの緒方智絵里であった。おずおずと、返事がないことに若干の不安を抱きながら、事務所の奥に踏み入っていく。

通例、緒方智絵里の休日は、お気に入りの公園や河川敷などで四つ葉のクローバーを探す、散歩をする、家でお絵描きをする、などが挙げられるのだが、彼女がアイドルの世界に身を投じてからというもの、オフの日に自らが所属するプロダクションに顔を出すことが多くなった。

顔見知りで、引っ込み思案で、外で遊ぶ友達もいなかったため、智絵里がプロダクションに滞在する時間が増えるのも無理はなかった。

故に、事務所に誰もいないと暇を持て余してしまうのだけれど、それはそれで覚悟しているところでもあった。その時は、大人しく散歩でもしながら帰ろうと心に決めていた。

「——あ、おはよー」

まず、ソファに深く腰掛けている三好紗南の声。

「……ん、おはよう」

続いて、向かいのソファで寝転がっている双葉杏の声。いつものように、とても眠そうである。

二人とも携帯用のゲーム機を手にしており、対戦格闘のゲームに興じていた。ボタンを押すたびに追隨して身体が動く紗南と、いつ如何なる時もうつ伏せの体勢を崩さない杏が対照的である。

「よっ、とりやつ。……ここだっ！」

「げえっ！ そりゃないよ……」

「へっへー、隙を見せた方が負けなんだよーこういうのは」

「むー……有り余る暇をゲームに費やした杏と対等に渡り合えるとは……やはり天才か……」

「あんまり褒められてる感じしないねそれ」

ゲームに没頭している二人に声を掛けていいものか智絵里が躊躇していると、まごついてる智絵里に気付いた紗南がちよいちよいと手招きをする。

「ほら、こっちこっち」

「う、うん……」

戸惑いながらも紗南の横に腰を下ろすと、「智絵里ちゃんもやってみない？」と気さくに提案してきた。智絵里が咄嗟に杏を見ると、彼女はいつも通り気だるげに頷くだけであった。

一応の承認が得られたとはいえ、先程まで彼女たちがプレイしていた対戦格闘ゲームの世界に身を投じるのは、いささか無謀な挑戦であった。

「ごめんなさい、わたし、こういう激しいのはちょっと……」

申し訳なさそうに告げると、紗南は少し考え込むような仕草を見せた。

「うーん、それもそっか。ずっと杏さん相手にしてると、こういうとき感覚が麻痺しちゃっていけないよね」

「杏は……選ばれし者だから……」

臆面もなく宣言する杏の声色と体勢からは、いくばくの勇ましさも感じ取れない。が、それもまた杏らしいと紗南は苦笑する。つられて智絵里も小さく笑い、その際に紗南と視線が交わる。

「そういうことなら、あたしが智絵里ちゃんに似合

うゲームを見つけてあげよう！」

「えっ、でも、紗南ちゃんも遊んでんたんだし」

「いいのいいの。杏さんも寝てるし」

「ぐう……」

本当に寝ていた。

猫のような気まぐれさである。

「まあ、あたしがゲームを薦めただけなんだけどね。きつと、智絵里ちゃんが面白いつて思うゲームもあると思うんだよ。うん」

「そう、かな」

「そうだよー」

紗南はソファの裏からリュックを引っ張り上げ、その中からいくつかソフトを選び分けていく。ああでもないこうでもない、と智絵里のために考えを巡らせている紗南に申し訳なく思うのと同時に、嬉しさも感じていた。

何か手伝えることはないかな、とテーブルに並べられたソフトを見渡してみても、智絵里にはちんぷんかんぷんであった。中には際どい衣装を身に纏った女の子たちの絵もあり、どういう内容なのか気に

なりつつも、想像を絶する答えが返って来たらどうしようかと、ひとり悶々とするしかなかった。

「智絵里ちゃん」

「ひゃっ!？」

声が裏返る。

紗南も始めは何事かときよんととしていたが、智絵里の目線を追っていった先に露出度の高い例の美少女ゲームがあることを知るや、急に厭らしい笑みを浮かべて智絵里の肩を肘で突き始める。

「これはこれは……何も知らないような顔して、智絵里ちゃんも好きですのう」

「ち、違います! これは、たまたま目に入っただけで……!」

「じゃあ試しにこれやってみる?」

「えっ……?」

返事に窮する。

そこに付け入るかの如く、紗南がすかさず追加情報を差し挟む。

「確かにパッケージはなんかこうあからさまだけど、中身は正統派のシューティングゲームだよ。老舗の

制作会社だし、これ系のゲームには珍しく初心者でも楽しめるように作ってある……んじやないかな。

いや、あたしは初心者じゃないからそこそこよくわかんないんだけど」

紗南の力説する通り、パッケージの裏面にはシューティングゲームのスクリーンショットが並んでいる。色とりどりのビー玉が散りばめられたかのような光景は、混沌としていながらも、どこか惹かれるものがあつた。

折角だから、と自分に言い聞かせるように、智絵里は小さく頷いた。

「うん。……じゃあ、やってみようかな。ちよつとだけ」

「よし、決まりだね!」

満面の笑みで、件のソフトをセットする紗南。

その素敵な表情に影を差すのもどうかと思いながら、智絵里は申し訳なさそうに告げる。

「あ、でも、うまくできないかもしれないし……」

「そのへんは気にしなくていいよ。ちよつとでもゲームの面白さに触れてくれたらいいなって、あたし

ピピと鳴る時計に起こされて、私の一日が始まります。

日差しはカーテンで遮られながらも、きちんと部屋の中に光を落としています。暖かさはなくて、朝の冷え切った空気が布団の外では広がっています。目覚まし時計を止めるために伸ばした腕も思わず戻ってしまいそうになるぐらいの寒さですけど、実家のほうと比べると寒くはありません。腕を伸ばして目覚まし時計を止めて布団から出ました。

カーペットは敷いてあるものの、床が冷たく、つい足を布団の中に戻してしまいます。ひやっとした感じはいつまでも好きになれそうにありませんけど、我慢です。部屋の外、リビングではタイマーできちんと八時ごろに暖房がつくようになってるので、扉の向こうは春のように暖かいはずです。

冷たい床に足を下ろして、寒さを芯まで感じる前に部屋を出ました。部屋の外へ出ると、暖かい空気が私を出迎えてくれます。さっきまでの寒さはもうどこにもありません。やっぱり暖かい方が良いです。あくびをしながらカーテンを開けると、窓の外で

は太陽が輝いています。冬晴れです。

こういう日は、日の光を浴びながらお昼寝をしたくなりますが、今日はやるのがいくつかあるので、そうもしてられません。私はやる気を出すために顔を洗いに洗面所へ行きます。洗面所への扉はこの部屋にあるので、冷たい廊下がないことがとても嬉しいです。私はいつものように洗面所へ行きました。そこで私を待っていたのは、ぼさぼさ頭の私でした。いつもはそんなにひどくならないですけど、時々嵐が通った後みたいな髪型になっている時があります。それが今日みたいで、鏡の中の私は、本当にぼさぼさです。

今日はオフですけど、外に出る用事があるので家でゴロゴロしてられません。結局、私はいつも通りの生活をするしかないので。私は洗濯機の上にタオルと替えの服を置いて、服を脱ぎました。

私は脱いだ服を洗濯機の中に入れて浴室へ入りました。蛇口を捻るとすぐに温かい水が出てくるので、未だにびっくりします。実家では十数秒待たなくてはいけなかったので、こうしてすぐに温かい水が出

てくると嬉しいです。

湯気が浴室を満たしていきます。辺りはもう白くて、まるで雲の中にいるような、そんな心地がします。もおー、寒くはありません。

S

お風呂から上がったので、着替えます。灰色の長袖シャツに、ジーパンで。とてもアイドルとは思われないような格好ですけど、これが一番過ごしやすいです。オシャレというオシャレはできませんが、お仕事のできるので、普段はこんな感じですよ。

着替えた私は台所へ行って、実家から送られてきた牛乳をマグカップに注ぎました。八分目まで入れてちびりと飲みます。小さい頃から続いている習慣で、これを飲まないとい元気が出ません。

私は牛乳をちびりちびりと飲みながらテーブルの上に置かれたリモコンを取り、テレビを点けました。テレビには凜ちゃんとななこちゃんが映っています。私も牛さんと出てみたいですけど、まだそういうお

仕事が出来たことはありません。

ここは東京で、私の実家は岩手で。

そう考えると、そういったお仕事が出来ないのも頷けます。実家以外の酪農家さんのところで出演するのもおかしな話ですし、きつとプロデューサーさんが断ってくれているんだと思います。

テレビでは、ラフな格好の凜ちゃんがフリスビーを投げて、それをハナコちゃんが空中でキャッチしています。あんまりにも綺麗にキャッチしたので、つい見入ってしまいます。こういうスキンスリップは牛さんとは取れないので、少し羨ましい気がします。牛さんに、会いたいです。

それに、冬の牧場は大変です。人手が足りないとい何もできないですし、何より雪が降ります。冬場の雪かきに人が取られてしまうと、人手不足がよりひどくなってしまうから。こういう時は実家のほうでお仕事を手伝いたいと思いますけど、中々難しいところですよ。

それに、頑張つてきなさいと言ってくれたので、帰るには少し忍びないです。

プロデューサーさんと一緒に帰っても大丈夫な気はするんですけど……仕事の様子を話せませすし、きつとお母さんたちも納得してくれます。それに、お母さんたちも喜んでくれますし。

そんなことを考えている内に、テレビの端つこに十時という時刻が表示されました。まだ朝ごはんの支度も、洗濯もしていません。久しぶりのオフだからか、ぼんやりし過ぎています。

とりあえず、時間短縮のために洗濯機を回します。回している内に朝ごはんを食べて、良いタイムングできつとお洗濯が終わってくれるはずですよ。

S

食事も終わり、洗濯機から洗濯物を取ります。洗ったものをかごに入れて、自分の部屋に戻りました。お客さんが来るので、あまりはしたなくないように、ベッドルーム側のペランダに干します。

外へ出ると、冬らしく乾燥した空気が頬を撫でていきます。こっちの冬の風は寒いというよりも冷た

く感じられて、私はあまり好きではありません。それに、冬の匂いがあるまりしいのも好きじゃない理由の一つです。

にゃおーんという声が聞こえて、私はペランダから下を覗きました。道端で猫さんがお姉さんに撫でられています。近所の猫さんです。私も何回か撫でさせてもらいました。人懐っこい性格で、近所で専ら評判の猫さんです。三毛猫のようで、白と黒と黄色の三色が可愛らしく、また首輪の鈴がよく似合っています。

私は猫さんを見るのをやめて、洗い物を干すのを再開しました。これが終わらないと、外へ出られませんが。今日は図書館へ本を返しに、買い物をしに行かなければなりません。全部の洗濯物を干し終わると、ペランダは色とりどりです。といっても、着られる服はかなり限られているので、服の種類は多くありませんけど。

今日一日雨は降らないでしょうし、洗濯かごはそのまま外に放置して、中へ戻ります。机の上にある本を手にとって、ぱらぱらと捲ります。中に何も挟

ん、んー……なに、誰よ……眠いんだから寝かせなさいよ……

んごつ……

……ん、あ、なに？ え？ あ、ちょ、揺らさないで、揺らさ、揺らすなって言ってるでしょうがッ！

ゲホッゲホッ。

なんなのよもう、寝起きに大声出させて……いま何時よ、八時半!? ちょっと冗談でしょ、久しぶりに日曜が休みなんだから、もう昼まで絶対起きないつもりだったのに。

それ以前に、光、アンタどうやってアタシの部屋に入ったのよ。

え、鍵開いてた？

……。

いや、だとしても勝手に他人の部屋に入るってどうなのよ。

トモダチだからってそういうことじゃないでしょッ！ アンタ親しき仲にも礼儀ありっていう言葉をつけていうかアンタとこのレイナサマがいつトモダチ

になつたのよッ！

え、九時？ 九時がなによ。ていうかアタシの話聞いている？ アタシとアンタは……

ライバル？

強敵？ とも？

ふーん、なかなかいいじゃない。それで行きましょ。

まあアンタもようやく自分の立ち位置つてものが分かってきたようじゃない。アタシは正義の味方なんものととは所詮相容れないわけよ。それを理解したらこれからは……

だから九時がなんだつてのよ。

は？

マジカルテット？

まじ、かる、てつと？

光、アンタ、アタシの前でその単語を言うってことがどういふことか分かってるんでしょね。

アレのせいで……アレのせいで、アタシは最近……！！ 通りすがりのガキに変身してって頼まれたり！ 通りすがりのオッサンにサインを求められた

り！ 通りすがりのお婆ちゃんに握手を要求されたり！ 築き上げてきたアタシのイメージが崩壊してしまっているのよッ！ お婆ちゃんには頭まで撫でられたわ！ 分かる!? この苦しみが！

……全然よくないわよッ！

ゲッホ！ ゲホゲホッ。はあ、はあ……

……で？

ああ、そういや毎週日曜九時から放送だったわね……ゲストルーム？ 一人で見なさいよそんなもん……別にテレビの大きさなんてどうだっていいでしょうが。

ていうか別にアタシじゃなくても寮の誰かでもいいでしょ。紗南とか。

起きなかつた？ また徹夜でゲームでもしてたのかしらねアイツは。

ていうかアタシより先に紗南の……なんでもないわよ！ 三人でつてだからなんでもないって言うてるでしょうがッ！

あーあー分かつたわよ、分かつた、もう一緒に見てあげるから、ちよつと一旦出て行きなさいよ。

……着替えるからに決まってるでしょうがッ！

……はあ、はあ、もう、朝からなんでこんなに疲れないといけないのよ。アイツといるとホント疲れるわね。

というかなんで今週に限って……あ、そっか、光が脇役で出る回つてそろそろだったっけ。

特撮出たがってたから、撮影の時はだいぶはしゃいでたっけ。なんかスタッフの人達と一瞬で意気投合して……特撮オタク怖っ。

服は……まあ部屋着でいいわよね。あー、そろそろ洗濯しないと……休日は洗濯機混むのよね。面倒だけど日のあるうちに……

うっさいわね！ いま行くわよ！ ドア叩くのやめなさい！ 近所迷惑でしょッ！

ゲホゲホ！ はあはあ……犬かアイツはッ！



麗奈、ほら、早く早く。ふう、間に合った。

麗奈が中々起きないから、もう始まつちゃうかと

思ったよ。

録画？ もちろんしてるけどさ。

こういうのは最初はリアルタイムでワクワクしながら見て、あとで録画をじっくり見るのがいいんだよ。

え？ いや、そうでもないよ。何回も見返しているうちに、こう、このシーンは監督がこういう意図をもって撮ったんだとか、こっそり仕込まれた細かいネタとかに気付いてさ、それがまた面白いんだよ。

大丈夫。麗奈もそのうち分かるから。

でもさー、アタシ本当に驚いたよ。麗奈が正義の魔法少女って。麗奈も決まった時は、ミスキャストだー、って騒いでたよね。でも、Pがなんか「行けるんですけど！ こりゃ行けるんですけど！」とか言ってたから、一体どんなことになるんだろうって皆で話してたらさー、大人気じゃん、麗奈。凄いいよね。照れなくてもいいよ。

え、なんで今更って、ほら、麗奈と一緒に見るの、初めてだから。

最近では麗奈、撮影とかで全然休みなかったじゃない？ だから、今日たまたま休みだって聞いて嬉しかったな。麗奈とアタシが共演する回と一緒に見るからさ。麗奈は嬉しくないのか？

……あ、始まった！ ……お、おー、凄い！ やった！ アタシ出た！ アタシ出てるよ！ 麗奈アタシ出てる！

麗奈？ なんてそんな疲れた顔してるんだ？ 眠いのか？

なんでもない？ ふーん。まあいいや。

あ、川島さんだ。

これさー、絶対全国の視聴者は驚愕してるよね。敵幹部がいきなり主役の担任として出てくるとかさ、誰も予想できないよね。アタシも台本読んだ時びっくりしたし。でもさ、考えてみると、十話以上使って今までレイナの学校生活や私生活を一切描写してこなかったのって間違いなくこれのためだよ。

うーん、川島さん、やっぱり演技上手いなあ。こだけ見ると完全に優しい先生だもんね。

あ、レイナ走ってた。ここ大変だったよね。麗

永久とこしよの闇の中で血の盟約を交わしてから幾星霜。煉獄より出ずる鎖は更なる魔力を以てこの身を縛り、最早この漆黒の翼であつても羽ばたく事は叶はず。

安寧の日々を想う言の葉は那由他の彼方へと過ぎ去り、今はただ悠久の刻に星の輝きを見るばかり。

だが！ 闇の使者たる我であれば、この深淵に広がり苛む亡者の嘆きこそが、新たな力を生み出すのだ。

聖杯は満たされた。鎖の刻印に焼かれし我が魂。その欠片で綴られた魔導書は冥き黎明へと導く標となつて、儀式はいよいよ終焉の刻を迎えている。

「遙かなる時を刻むは、果てなき空と大地の鼓動……か」

最後の一手を前にして、いつかの情景が脳裏に蘇る。

往く道は永遠なれど、過ぎるは須臾しゆゑの幻。交わり、離れる事が宿命さだめだというのであれば、今ここに至る刹那の選択をこそ、私は望もう。

「む……あれは」

廊下の先、T字路になつてゐる所を横切つた見覚えのある影。

それは間違ひなく探していた人物であり、儀式を完遂させるための最後の一欠片。

噂をすれば、というやつだろうか。

——悪なる姫よ、我に力を！

生憎と、更なる闇へと続く扉を開くための鍵を、私は持ち合わせていない。

だが歩みを止めるといふ事は、真なる意志にあらざ。臆するなかれ。かつて夢想の先に見た蒼の光は、この手中にあるのだから。

そう念じるように胸の前でぐつと拳を握つて、彼女の後を追うように廊下の角を曲がる。

けれど、かなり早足で歩いてきたのか、その背中には既に大分先にあつた。

「ま、待つて——」

ばたばたと駆け寄つていくものの、こちらに気付いていないのか、先を行く彼女は振り返る事もない。れば歩みを緩める事もない。

後から思い返してみると、この時の私は追いか

る事に必死で、更に言えば儀式を成功させる事で頭がいつばいで、だから気付かなかつたのだ。

早足で廊下を進むその背中。何人たりとも近付く事を許さない雰囲気。有り体に言えば、彼女は不機嫌だった。それも結構なレベルで。

もう一つ不幸な事があつたとするならば、やつとの思いで追いついた私が彼女にかけた言葉こそが、その不機嫌の原因だつたという事だろうか。

「蒼炎の歌姫よ……ひっ!?!」

睨まれた! 睨まれた! すっごい睨まれた!

「加蓮、いい加減にしないと——って、なんだ蘭子か。あ、ちよ」

なんだか名前を呼ばれたような気がしたけれど、振り返る事など出来るはずもなく、私は脱兎の如くその場から逃げ出したのだった。

☆

「禁忌に触れたか……」

我が闇の言の葉は強大な力を持つが故、瞳を持た

ぬ者には理解が及ばぬ事もある。

されど蒼の姫は、あるいは私をも凌駕する力の持ち主。禁呪の言葉は正しきなれど、天の示す刻を合わせられなかつた、という事なのか。

膨大な魔力の消費。儀式の完遂には至らず、手に取めたはずの蒼の光も、今はどこか弱々しい。

事務所のソファから窓の外を眺めながら、何がいけなかつたのかを考えようとして、でもすぐにさっきの彼女の顔を思い出して、ぶるりと肩が震えた。

彼女。蒼炎の歌姫。渋谷凜。

「やあ蘭子、随分と浮かない顔をしているね」

「黒の眷属か……」

かけられた声に振り返ると、いつの間に事務所に入ってきていたのか、すぐ後ろに飛鳥ちゃんが立っていた。

ソファを回り込んで私の隣に座るその手には、二つのマグカップ。

差し出された片方を受け取ると、器用に指の間に挟んでいた砂糖とミルクを私の前に置いてくれた。

「数は合っていたかな」

「……うむ」

それはよかった、とだけ言つて、飛鳥ちゃんは自分のマグカップに砂糖を入れていく。

その様子をなんとなしに眺めていると、こちらの視線に気付いたのか、不意に砂糖を入れる手が止まった。

「本当に浮かない顔をしているね……いや、言わなくともいいよ。これでもボクはキミの奏でる魂の旋律を理解しているつもりさ。そうだね、さしずめ凜の事だろう？」

「我らに魂の共鳴が……！」

「前にも言つただろう。ボクらは一にして全、全にして一さ。この程度なら容易い事だよ」

再び砂糖を入れながら得意気と言う飛鳥ちゃんに、私はただただ感心するばかりだった。

確かに出会った時から私の言葉を理解してくれた彼女ではあるけれど、ここまでとは思っていなかったのだ。

「まあタネ明かしをすると、さっきの廊下での一部始終を見ていた……いや、見てしまったという方が

正しいかな。キミは気付いていなかったようだけだね」

言われて記憶を紐解いてみたけれど、周りに誰がいたかなんて事は元より、どこで凜ちゃんに追いついたのかという事ですら、サッパリ覚えていなかった。

それだけ追いかける事に必死だったのだろうか。その事がなんだか申し訳なくなつて、私は顔を俯かせてしまふ。

「キミが謝る必要はないさ。それに、謝るといえば凜から伝言を受けていてね」

「凜ちゃんから……？」

「このセカイというものは案外上手く回っているのだと感心するばかりだよ。もつとも、それはやっぱり彼女、あるいはキミのような存在に対して、という事なのだろうけれど。まあセカイの一端を垣間見ていると思えば、中々に楽しいよ」

コーヒーを一口飲んで、少し苦そうな顔をした飛鳥ちゃんがまた砂糖を入れる。

「そう。凜からの伝言だ。といつてもなんて事はな